

あの棄てられた水族館を知っているかと噂は言う。科学世紀の京都地下に張り巡らされた数多あまたの地下道で装飾の施されていない区画はなく、カレイドスクリーンで海中の光景を映した地中水族館も例外ではない。優しい薔薇色となった海の中を魚群がひるがえ翻りと反転に煌めき、その度に水中の縞模様となつている光がかき乱されて拡散する。本物よりも本物に近い映像が足場以外の全方向を埋め尽くす擬似的な水中庭園の夢は今でもそれなりの人氣を得ていたが、中でも廃棄され誰からも忘れ去られた所こそが舞台だと。

噂を聞け。鋭い非常灯の光と埃っぽい空気を着用した静寂が支配者となっている通路の奥深く、スクリーンはすべて剥げ落ち配管すらむき出しとなった壁の何処かに黒天鵲^{ひろうと}絨の黒となった場所がある。そこから魔女の住処へ行つた者たちの顛末を聞け。

秘薬を持ち帰り肉体的な美を手にするも精神を引き裂かれた者がいる。願いの代価として要求された現代の合成食を手にして出入口を見失い、今も地下廃棄道を彷徨う者がいる。魔女に無礼を働き透明な鳥に全身を喰われて声だけになった者は、同じく噂を信じて近づく者の元へどこからともなく飛び来たり警句を発すること千夜に及ぶと。

噂の常で少し調べればそれら全てがありえざる事だと

知れた。そもそも廃棄されたままの地中水族館というものは存在しておらず、何かしらの別物が跡地に建てられ塗りたくられていた。用済みとなって空いた場所を忘れたままという怠惰を二十二世紀の人間は許さなかったのだが、痕跡すら抹消され写真や映像の記録でしか残されていない、もしくは人々の記憶の中にしか息衝いていない場所へ何かの拍子に繋がってしまう事があるのはすっかり忘れているようだった。

故に灯を持って廃棄通路に入ってきた秘封倶楽部の二人が噂に反して床に積もる埃の上に他人の足跡を見つけられなかったのは当然だったのかもしれない。定間隔で壁に埋め込まれた青白い人工灯が照らす壁は青。出処のわからぬ埃も青。地に刻まれた二組の足跡もまた青く、

ただ宇佐見蓮子の手にした筒型の携帯照明は白であつたせいで二つの少女の影は惑うようにゆらめいていた。やがて二人を包むように展開していた照明が蓮子の操作で絞られて一本の光束となり、マエリベリー・ハーンが意味ありげに指さした剥き出しの壁を動き回る。二人は笑つた。何しろ今夜の獲物が真であることを知つたのだから。

秘封倶楽部の知る噂は壁の向こうの魔女の住処を知つてゐるかと思ふしげに囁く。そこは深い森。木々と土と小さな生物の宴場であり、柔らかい道をたどつた先に魔女がゐるのだと。黒い壁をそつとなぞつたメリーの指先が埃で白く汚れる。おそらくは彼女だけがそこに見る境界に沿つて。二人は手馴れていた。幻想へ飛び込むこと

に。そこが例え世界の終わりに見つめられる場所であつたとしても秘封倶楽部は暴き、飛び込まずにはいられないのだ。

やがて向こう側へと抜けた秘封倶楽部を待っていた光景は噂に違わぬ場所、その夜だった。天を衝くかと思わせるほどの豊かな巨木を筆頭とする木立の陰影の上には広い空間が持つ深い暗闇が広がり、閉じられた空間に生え茂る植物と土の濃密な匂いで満ちている。森の縁に彼女たちは立っていた。目の前に伸びている土を均ならしただけ小道からは微光がにじみ出し、背後の高い壁にびっしり描き込まれている嵐の海原か妖精の狩猟に見える流線も銀光を発している。頭上の空には星も雲も無く、やがて蓮子はそれが空ですらないことを指摘した。何しろ時

刻も現在地も知ることができなかつたのだ。眼が慣れてくると空もどきもまたわずかに発光しているのが見てとれ、規模はわからぬまでも天蓋がこの地を覆っているのに気づいた。

ひそひそと道を進みだした二人の耳をくすぐる葉と枝の音に混じり靴底を厚くしておいて良かつたとか以前行つた場所を思い起こさせるだとか言い合う少女たちの声がしばらく続き、やがて曲がつた道の先にある開けた場所を確認すると声が止まる。そこには明らかな人工物が散見された。木製の椅子。広い机の上には明かりと影に塗りつぶされた物品の数々。そして人間。ゆつくりと歩いて来る秘封倶楽部に気づいたのか下を向いて馬鹿げた大きさの本を読んでいた少女が顔を上げ、黒の三角帽子

と金色の髪に沈んでいくように深く背もたれに体重を預けて言った。

「道連れ付きとは珍しい。止まれ。用があるならその椅子に座れ。ないなら回れ右で振り出しの壁に触れろ」
快活な魔女の声に蓮子が応える。

「貴方に会いに来た」

「そんなことは分かっている。用件を言え。言うまでテールにはつくなよ」

「貴方に会いに来た」

同じ言葉を返したメリーの声を聞いて魔女は悩ましげに目を細めたが、合点がいったのか片眉を上げた。

「噂好きか。初めてだがそういう奴は何処の世界にも居るんだな。新聞記者でもやってるのか？」

「学生よ。メモを取りながらお話してもいいかしら。魔女殿」

「いいとも。ついでに何か飲み物を献上する気はないか。毒以外なら喜んでいただくぜ。おい、待て」

メリーが取り出した手のひらサイズの厚紙のような物を指さして魔女が眉をしかめる。

「なんだそれは」

「メモよ。連れは古臭いノートと筆記用具だけど私は今風に仮想現実。コンタクトレンズで虹彩の動きを拾って浮いた光の板に文字を書き込むの。この強化紙は電源やらカメラやらが着いた起動鍵。興味があるならどういったものか説明もできるけど」

「結構だ。バルバロイって知ってるか」

警戒心を顕にした目つきで魔女は二人が椅子に座るのを見てから言つた。

「ところで欲得ずくじやない分あんたらは少し信用が足りないな。私を痛めつけて都合のいい談合にしないとも限らん。一度試してやるからその後で取引といこう」

返事をする間もなく魔女が立ち上がり背中を向けた瞬間そこへ別の女が立っていた。蓮子とメリーの心臓が二拍を打つ間に娘たちができた事と言えば呼吸のみ。女にとつても不意の出来事であつたと見えて視線を左右に一度振つたものの、それだけで後は秘封倶楽部の方をじつと愉しそうに見つめているのだつた。女の身体は臃じみており三千丈よりなお遠くに見える山峰の切っ先さながらに儚げ。髪こそ魔女と同じ金色だつたが現実の物とは

思えぬ煌めきを秘めており、鋭い目は星の光さながら。
なによりも額から伸びる一本の角と発する雰囲氣こそ異
形に他ならぬ。

「では何故に呼び出したのかも知らぬままという訳か」
おお 巨きな盃から中身を飲み干して机の上に置き射干玉の
声を女が投げかける。完璧に音をたてず為された動きの
異常さを蓮子がいぶかしむ間に己の長い髪を一房つまみ
眺めてから投げ出した。メリーはそこに光が散らばるの
を見て眩く。

「鬼」

「そしてお前たちは人間の娘。鬼が娘を前にどうするべ
きか知らぬ訳ではあるまい？」

「それほど薄い身で私達に触れることができるかしら。」

どちらかと言えば幽鬼じゃない」

鬼が逡巡しながら己の掌の裏表を眺める間、挑発をたしなめるように動いたメリーの視線に蓮子は目の端の動きで答える。今この身は夢であり、いざとなっても自分は無事なのだからと。鬼の肩口をじっと見つめていたメリーは手にしていた厚紙を怪物の後ろへ滑り落とすように投げた。

「勇気ある子どもの常ではあるが」

鬼が微笑みながら中空へ指を一颯いっさつすると同時に己の脳をなぞられたのを感じた蓮子は未知の感覚に身震いし、次いで口も開けぬと知りついに恐怖した。

「愚か者と変わりない。触れずして触れるなど我々にとって造作もないのだよ。身体がまるで水のようにブヨつ

いているのは認めるが」

「では貴方を戻す術を手にした子ども達はどう？ それも今すぐに。どこへ戻るのかは知らないけれど置かれた盃を手にする間もなく」

メリーが口を開く。

「知っているなら脳を撫でられた今すがら追い返したはずだ。それとも恐怖を感じていないと嘘でもつくか」

「なぜならば私たちは魔女に、貴方の主人に試してやると言われたからよ。盃はもらっておいてあげる。背中を見ればいいんでしょう？ 肩まで這い出している結界の隙間のようなものを見せるのが貴方達のタネ」

「おまえが動くより速く私は動けるぞ」

「貴方が動くより速く私は見るよ。そこの後ろへ投げた

板には眼が付いている。カメラはご存知？」

メリーの一言が鬼の顔を静止させて三者間の緊張が沈黙によって十分に膨れ上がると、妖女は喉だけで笑い始めた。その音がずいぶんと楽しそうだったので少女たちはつい聞き惚れてしまい、それを見て鬼はなお喜んで言った。

「脅かしてすまなかつた。勇敢な二人の名前を教えておくれ。私は星熊^{ほしぐま}勇儀^{ゆうぎ}。飲んでいた途中でいきなりこんな場所へ突っ張りを食らった鬼だよ。私の主人とかいう奴の話も面白そうだ」

秘封倶楽部の名乗りを聞いてから語りはじめた勇儀によれば、彼女自身が望んでこの場所へ連れて来られているのではないと言う。突然呼び出されて人間と対面させ

られ始めたのは最近のことであり、暇つぶしに脅かしてはみるものの臆病な者ばかりでつまなかったと鬼は笑った。はじめてこっちへ来た時に妙な違和感を背中に感じたので人間に見てもらおうと振り向けば元の場所へ戻った事。それから違和感は払拭されないものの本来居る場所では他の者に背中を見せることができたし大事はなさそうなので放っておいた事も語られた。次に秘封倶楽部がこの場所にいる経過を説明すると勇儀は一度瞳を閉じた。気高い豹さながらに。

「その魔女について心当たりはある。だが私の知る人間とは少し時間が違うね。居なくなったなんて噂は聞いたこともないから、おそらく少し先の話になるんだろう。もしくは夢のまた夢と繋がっているのか」

「夢が夢を見るの？」

メモを取りながら蓮子が聞いた。

「ああ。現も夢も表裏ならいいんだが捻れてしまうとそうもいかない。夢見る夢が生まれてしまうし現は現に目覚めてしまう。入口と出口が同じ場所に繋がっている入れ子を想像できるかい」

「クライン体みたいになつてゐるのかしら」

蓮子が厚紙を取り出して指を走らせるとメリーが中空を見てなるほど、と言った。その様は鬼は面白がる。

「不可視の式か。私にも見せてくれないか」

「ええと。専用の薄い膜を瞳に乗せないといけないんだけど今は用意できないかな。そもそも貴方の眼に嵌められるのかどうか。零れ落ちそう」

「ちよつと目を見せておくれ。へえ。玻璃を取り付けてそれを見てるのかい。人間のやる事は変わらんが道具は変わってるもんだ。どんな付喪神ができることやら」

無意識に空の盃を顎のあたりまで持つていった鬼はそこで悲しそうな顔をした。

「酒は無いかな。そんな顔しなさんな。飲み始めた途端に酒が消えちまったらガツカリするだろう？ 私は今してるんだ」

酒はないと蓮子が告げると勇儀はしよげ返った。

「帰るよ。あんたらは面白そうだけど今は酒だ」

「なら次は何か見繕ってくるよ」

「おや。ならひとつ貸しを作っておこうか。約束を違えるんじゃないよ」

腕から垂らした鎖を鬼は鳴らした。

「こんな場所まで転がり落ちてきた魔女はきつと何かを探しに来たんだ。乾いている者には何を与えるべきだろうね」

音一つなく鬼が振り返ったと思うや魔女がそこに戻ってきており、二人の顔を観察した。

「私の背中を見せて逃げ出さなかったのは初めてだ。座っていいぜ」

「逃げるものにも大したことなかったよ」

「それはどうも」

「星熊勇儀」

メリーの言葉に魔女の表情がくるくる変わる。

「私たちが何をしていたのか知りたいなら聞かせてあげ

るわ。どうやら何が憑いてるのか知らなかったんでしょう？ でも交換条件がある」

「待て」

「面倒な相手には背中を見せて追っ払っていたんでしょうけれど今回はアテが外れたね。さあ。座って私たちの話し相手になって頂戴。お互いの益になる話し合いをしようじゃないの」

座った蓮子が机を指先で二回叩いた。

「いいか。あんたらはここに一度しか来られないんだ。そんな奴らに深入りすると思うか。適当なことは話してやるが何もかもとはいかない」

「へえ」

大げさにメリーは肩をすくめる。

「なんで一度だけなの」

「知らん。だが餌をぶらさげて再会を約束してやった人間でも戻って来たことはないんだ。そっち側の入り口がどうにかなってるんじゃないのか」

「どちらにしろもう一度ここへ来るのは簡単だけど」

「あらメリー。それは勘？」

「ええ。結界が閉じる訳じゃないでしょうし」

「待て」

「さっきから待てばっかりねえ」

「うるさいな。そっちのあんたは結界が分かるのか」

「見えるよ」

腕を組んで秘封倶楽部をじろじろ見ていた魔女はやがてぼそりと言った。

「そこそこ信用してやる。私は霧雨魔理沙。人探しに来た魔法使いだ」

本日二度目の自己紹介をよどみなく終えた秘封倶楽部が聞くところによると魔理沙がこちらに来ることになった発端は一人の巫女が消えてしまったからだという。魔理沙との弾幕ごっこ（リアルなシューティングゲームのようなものだ）と蓮子は註釈をメモした）の最中に彼女は失われた。なんでも境界の移動を駆使した後にそのまま出てこなくなったのであり、まるで神隠しのようなという。メリーの感想に魔理沙は淡い苦笑をもって答えた。誰にも解決ができないまま時が流れていく中でついに魔理沙はひとつの仮説を思い立ち、知り合いに頭を下げ協力を頼んで回りあらゆる用意をしてから——この中にかの

鬼熊勇儀も含まれていたようだ——行方不明者の後を追いかけた第一歩目でここに立っていたのだと言う。

普段の魔理沙が森住まいだったのに加えてこの場所が人工的な、不自然な森であったのが幸いした。水と食物に困ることはなく無人であり、壁と最低限の文明的な生活設備が備えられた建物すらあったのだ。時折迷い込んでくる人間を口と魔法で煙に巻いて情報と物を巻き上げながら小さな魔女は持ち込んだ未解決の仮説の整理や魔法の実験をして今に至っている。

背中を見せることで相手の態度が怯えたものになるのを見つけたのは偶然だった。元に戻るまでに間に魔理沙の記憶は無くなるものの便利だったので利用し続け今日はじめて何が起きているのかを知った。勇儀と同じく

肩口に結界のような物が垣間見えるとメリーに指摘された魔女は顔をしかめて、鏡で見る分には普通の背中なんだがと唸った。

魔法について問われた魔理沙は手品程度のことしかできないと説明した。彼女の住む世界と比べて力と自分を結ぶ線の間にある谷のような物ができていると説明し、間に架け橋を確立しない限りは多くの技が切断されるか錆びたままだろうと。空は飛べないが人間を吹き飛ばすのは訳ないぞ、とも素早く付け加えたが。

「帰るアテはあるの」

「一応な。迷子を見つけたらこいつが標になるらしい」

服の中から取り出した鈴をちりんと振って鳴らした魔理沙はメリーを意味ありげに見つめたが、彼女が首を横

に振ると諦めたように頷いた。

「帰る手がかりになればと思ったがそう上手くはいかないか。取り敢えずここに居たんじや埒があかん」

ここ。まずはこの大温室を知るべきだと蓮子は主張した。科学世紀の少女たちの持つ端末に情報は入らず、天蓋に広がる闇は蓮子が見上げても夜空のように返事を返さぬ。

「おいそれとゆりかごを暴いてくれるなよ。少なくとも大勢の人間がやって来るようなことになる」と面倒極まらないからな。一つだけわかつてることを教えてやるから。私も気になって天蓋の外をへばりついて見ようとしてな。向こう側に居るやつらと目があつたのさ」

「何かいるの？」

「ああ。魔法書の挿絵で見たような気がするよ。魚さ。口に入れたくないような形をしたやつばかりでな。スケッチは……これだな」

紙に殴り書きされたいくつかのシルエットを見て秘封倶楽部は悟った。特徴的なフォルムを持つ魚は深海に棲むものの他になく、つまり外に広がるのは深海なのだと。

ここは深海に建築された植物庭園なのだろう。光が届かぬ程度の大陸棚にドーム型の海底基地が作られるのは珍しいものの絶無ではなく、ここはそうした施設の中で棄てられたうちのひとつなのだと推察された。何かの手違いで稼働し続けてしまっている海底の植物園はおそらくは金持ちの道楽か何かだったのだろうという意見に落ち着いた。植物相を見ている魔理沙が断定したのだ。

知れる事と言えはそこまでであった。この一夜にしては上出来。焜^{こんろ}炉と漉^こし器にて魔理沙が淹れた茸茶も底を見せた頃、しばらく沈思していた三人は別れることに決めた。

「私はこの植物園が何処にあるのか、もしくはあったのか調べてみる。メリーも付き合う?」

「私は縁探しの神様めぐりをしようかな。巫女が私たちの世界にやって来てるかもしれない」

「レンコはくれぐれも慎重にな。マエリ……ベリーには疲労回復の粉を持たせてやろう。割と効くぞ。あー? 知らない? ふーん。」

そうだ。私用に外の知識で使えるような物を持ってきてくれよ。結界や時空間に関する物。重力に関する物も欲

しい。巫女は色々浮かんでるんだ。重力から解き放たれたと評される程度にな。できれば本がいい。あんたらのどうこうは魔力を吸い取られそうだ」

「わかった。新品のコンタクト探しとくわね。除菌済みの」

「人の話は聞くもんだぞ。黒いの」

その夜を境に彼女たちは跋扈を始める。鍵が錠前を外したのだ。

噂は言う。魔女のそばに人が居ると。それは一人ないしは二人の少女であり、魔女の意思を受けてさまざまな世界へ旅立っているのだと。特定の時間になると無重力を生み出す炭鉱跡地の深い陷^{かん}穽^{せい}を訪れた。位相がずれて地上へ落下し続けるはめになった人工衛星の中へ出向い

た。地球の重力の中心である地核へ渡った。

魔女は知識を蒐集する。端境^{はざかい}。万有引力。時間と神話。歪んだ時空。灯をめざす蛾のごとく物語は群がる。

それとは別に魔女は一人のままであり、使役する鬼と住処へ籠もり続けて探し続けたとも言われている（何を？）。

噂が噂に尋ね回り、その横を事実は一顧だに与えず歩み去る。三の三倍あるいは五の五倍の夜が魔女と鬼と秘封倶楽部を出会わせては過ぎていった。

結局のところ温室の結界を越えて魔理沙は抜け出すことができなかった。奇しくも彼女自身が言い放った籠さながらであり、建設された場所も絞り切れないままだ。京都の地下水族館と同じく存在していないのかもしれない。

ただ調査の過程で植物園に使用されている技術の数々は判明していき、疑いなく秘封世紀の生きる世界の物であることは知れた。深海の圧力に耐えうる天蓋は寄木細工や螺鈿のようにして散りばめられた金属板の集合体であり、組み合わせの僅かな隙間を埋める液体金属によって全体がゆっくりと流動している。潮流などで変化する外圧に対応させ同時に視覚的な変化を両立させていたのだ。内側は発光と熱反射を時間によって調節し、おそらく海と触れる外側は黒玉じみた外見をしていることだろう。

魔理沙が寝泊まりに使っている小さい建築物で外部から完全に隔離された管理システムを見つけたものの、浮かび上がった光学立体モニターに出てくる文字列がイギリズ文字・アラビア文字・漢字・キリル文字にデーヴア

ナーガリーとヒエログリフまで混在しているのを確認したところで秘封倶楽部は解読を諦めた。彼女たちの専攻に暗号解読は含まれていない。

庭園の世話をしている不可視の自動機械は勇儀がその存在を示唆した。決して人に近寄らない小さい物が潜んでいると或る一夜に鬼は言つたのだ。

それは足場の取り付けられた捻れた大木に鬼と秘封倶楽部が腰掛けていた時のことで、登り降りに多少難渋するのを除けば景観と座り心地は十分に満足できる場所だった。仮定が取れたと自動機械の存在をメモから消している蓮子の横目に鬼は自らの住処を地獄と言った。棄てられた地獄の構成や忌避される住人たちの話で盛り上がると、秘封倶楽部が持ってきた蒸留酒を全て盃に流して

鬼は一息に呷^{あお}った。

「いい火酒だ。たまの世界にはたまの酒が在るもんだね」

「お返しをくれてもいいわよ。神通力とか金銀財宝」

メリーが咲^わらう。

「それは勝負をして私が負ければ考えよう。相撲ができればいいんだけど、私だけがそっちを投げ飛ばせてしまうこの姿だと不公平だ」

「元の肉体でも不公平」

「飛車角金銀桂香落ちくらいはしてやるよ」

「それはどうも。案外と真面目で律儀ね」

「鬼だからね」

「じゃあ魔理沙に何が起きているのか教えて頂戴」と蓮子。「見当は付いてるんでしょう」

勇儀は蓮子を見た。鬼の瞳は頁岩けつがんであり悲しみが含まれているようでもあった。常に大岩がそうであるように。

「魔理沙はたどり着けなかった。だから呪われている」
盃の中で酒を転がしながら言った勇儀の声音に木々は静まり返った。

「多くの妖怪や神の力を借りて失敗してしまった。少なくとも私は力を貸したんだろう？　鬼が与える力は無償のものではないよ」

蓮子の顔がこわばる。

「代償を返されるのね」

「合力と呪いに差がない奴らも多いからね。これから先成功するかどうかじゃない。もう失敗してるのがマズいんだけど」

勇儀は天頂を見上げた。

「こんな場所にいたんじやあ債鬼も来ないか。不幸中の幸いだよ」

「私たちに出会えたこともそうだといいいけれど」

答えず無言で盃に飾られた北斗を見る勇儀にメリーが聞く。

「貴方からすれば蠅螂の斧つてところかしら」

「あんたらは立ち向かう氣力と知恵が多少はある。それは認める。ただ斧ではなく香氣だ。芳しきすら発して私たちをそそる人の抵抗。誰に飲み下されるのかわかつてるのかい？」

とは言え私も斧にはなれない。こんな狭間へ落ちこんで千切れた力と呪いの果て。間拔けな魔女に何とか残さ

れた一条が捻れて繋いだ鬼の幻にすぎない私だ」

最後の酒を継ぎ足し盃を傾けて鬼は続けた。星が眠るとするならばそれは海底でなければいけないと。空ではいけない。一切の光を厭う深い水底に眠る幾千の海星^{ひとで}は万古の昔に空から落ちてきた星であり、横たわるわだつみが岩の衣に付ける幾億の宝石は星の化身である事が自明なのだから。星の魔女がここにいるのは道理だと星の鬼は歌うように言った。事実歌っていたのかもしれないが人間の少女らには分からなかった。思えば鬼の歌を不吉だと秘封倶楽部は思うべきだったのだ。

最初に酷薄な事実を受け取ったのは大学内の蓮子だった。振られた賽のごとく手軽に、それでいて有無をいわさぬ情報は直ぐにメリーと共有されて魔女の森へは咎の

ようにして携たずさえられた。

「最終問題における一つの解答が少しだけ進歩したの」
眉をひそめる魔女の顔を弱々しく見つめる蓮子の指が
小さく揺れる。

「私たちの世界だと宇宙の終わり方がいくつも予想され
ていて、私はそれに関するその学問に近しいものだから
知ることができたの」

「らしくないな。要領が悪いんじゃないか」

「貴方が探している巫女はよく紅白と揶揄されたそうね」
割って入ったメリーの一言が波紋となつて魔理沙の表
情に広がっていく。波は矛盾で作られていた。すなわち
予測と拒絶。メリーに促された蓮子が続ける。

「予測が出たの。宇宙収縮説の最後。この宇宙が収縮し

きる直前はいい」

蓮子は一回のどを鳴らす。

「いったい何色になるのかという」

「嘘だろ」

「貴方が来て出てきた仮説よ。急にね」

宇宙の終わりについてはいくつかの説が生み出されていたが、いま持ち出しているのはビッグクランチと呼ばれる収縮説だと蓮子は言う。目新しくもない説でありそこへ色が追加されただけではあった。まるで視覚してきたと言わんばかりの新しい仮説は鉄とニッケルおよび新しい原子核がどのように紅と白を生み出すかを細かに、少なくとも蓮子程度の頭脳には至極もつともに見える論を展開していた。

「魔法数からズレている安定した原子核の発見がキモなの。その原子核に付けられた名前が」

「待て。やめろ。因果がおかしいだろ」

「こちらへ来る際に貴方が願ったのは何だったの。誰を探しに来たの」

願いはかなえられていた。ある意味で。ゆるやかな天蓋の回転の下で完璧な沈黙の翼が広げられる。やがてそこから自力で^{すべ}にり落ちた魔女は森より静かな目をして言った。

「たしかに何事にも縛られてないな。あいつらしいよ。私は人探しを進めるとするか」

そして魔女は宇宙死の論証を求め始めた。未だ目撃せざる終わりに関することであれば何であれ拾い集め、さらには魔理沙自らの予想も混ぜ合わせて蒸留していく。その最大公約数をおずおずと検分しては思い切り叩きつけて粉々にしていく毎日を過ごす彼女に時間は意味を無くし、よくあることだが人との関わりを厭いはじめた。

迷い込んでくる人間をおざなりにあしらい、もしくは脅しつけて手短に会話を切り上げた。時には留守さえ装った。もはや知りえぬ情報を手に入れようとしてもしない魔女は秘封倶楽部に対しても素っ気なくなり、手渡された本あるいは仮想現実のデータベースにかじりついたまま探し人についての最小公倍数を一方的に並び立てる。も

はや魔理沙は道に迷ってはいない。魔女は世界を信じているのだ。

やがて海底を訪れる秘封倶楽部の前にも魔理沙は姿を見せなくなっていた。いや。常に居るには居たのだ。森の広場に置かれた椅子と机は今や物があふれるように置かれるか吊るされるかしており、そこに人影の無い時は決まって木陰か道端を何かが歩んでいた。どこかにある終点を目指して前進を続ける影は、何かしらの調子に光が当たるとその部分だけに魔理沙を垣間見せてから歩み去っていく。背中を見せずに秘封倶楽部の視界を横切っていく黒い人型の渦動は、しかし影に染まった魔理沙なのか別の者か蓮子とメリーにはわからなくなっていた。

言葉にもその徴候は指先をちらつかせた。数少ない会話の端々で秘封倶楽部は魔理沙が何を喋っているのか理解ができず、魔女は少女たちの言葉を意味不明だと罵った。

瀆神とくしんの塔を思わせる巨木が葉を揺らしただろうか？。勇儀は変わらぬ態度であり、少女たちを伴って外へ出ようと誘いをかけたのはどの夜の事だったろう。魔理沙は無理でも勇儀が結界を越えられないとは限らないことを秘封倶楽部は初めて思い至り、事実それは叶った。

先導する二人の娘の背中を眺めながら歩く朧な鬼は最後まで人の目に触れることはなかったが、それは京都が深夜であつたのを選んだ道が常に闇に覆われていたからだろうか。

京を見下ろしたいという勇儀の願いのために三人は北へ向かつて歩き続け、やがて最後の扉を抜けてビルの屋上へ姿を現した。後日どうやってそこまで辿り着いたのか、そもそもどのビルであったのかを蓮子もメリーも思ひ出すことはできなかったが。

植物庭園と違い高所の風は吹き荒れていたため娘たちは上着を強く身体に巻きつけながら、扉に寄りかかつて静かに京都の灯を眺めている鬼を見つめている。

「古い京を俯瞰した時と同じだ」

勇儀の臉が琥珀色に煙る。

「窓や戸から漏れてくる灯や声や吐息に混じって叫びが聞こえてくるのは変わらない。あんたたちは聞いたことがあるかい。死にゆくひとつの叫びがその瞬間だけは夜

を支配する音を。その音が連綿と暁まで続けられるのが京の夜。そしてその支配をひとりで為せる者を妖かしと呼ぶこともある。魔理沙は成りつつあるんだろう。悪くない手だよ」

空を星が一つ流れる。

「あのまま生き続けるならば一人で幻想になることも可能だろう。隠者としてただひとつの目的に向かって知識を刻銘にしていく行程で己が身中の虫を捨て去り魔と化してしまえば振りかかる呪いをも手懐ける事ができるかもしれない。もしくは魔理沙が魔理沙でなくなれば呪いは行き場を失い霧散してしまうかもしれない」

またひとつ星が流れると少女らは震えた。

「星が落ちるには空の高さが必要で、沈むには海の深さ

が必要になる。人が死を携えて生まれてくるのに必要なものを知っているか？ いま立つこの岩屋を見てごらん。おまえたちの夜毎の叫びのために高く高く積み重ねられた塔を。京を。この全てがおまえたちのために背中へ冬を背負って順番待ちしているのを。おまえたちを模して。わだつみに人は似合わない。秘して封じておくんだね」鬼はその言葉を最後に沈黙し、いつの間にか秘封俱樂部を置いて消え去っていた。

ほどなく温室に一点の異常が生まれた。魔理沙を覆う影が重苦しく停滞し、厚みをまして凝固していったのだ。透明な機械庭師らに人として認識されなくなったように、秘封俱樂部が訪れた時には木に寄りかかる格好のまま蔭が巻き付き始めていた始末だった。いくら声をかけても

反応を返さなくなった魔理沙だったが時折り宙空へ指の
ようなものを振る仕草をしている。

「あれ何だと思う。メリー。魔法でも編んでるのかしら」

「仮想現実を動かしてるんじゃない」

「それは気に入ってくれたようで何より」

やがて蓮子が言った。

「あんな影の中にいたんじや宇宙の最期にたどり着いた
としても真っ暗なままでしょうに。そうなると魔理沙の
ような物にとっては暗黒の中で全てが終わる。あら、も
う到着してるわね。最終目標に」

「海の底にて世の終わり待つ。フライング・ダッチマン
に教えたら進路を海底に変えるかな」

永遠にさまよい続けるオンボロ船を想像して乾いた笑

いを上げた蓮子は見上げた円蓋の天頂を見て静止した。そこには地上と違う闇が広がっている。持ち前の異能が働かない彼女にとってはより異質な天であり、ふと魔理沙を探し続けて待ちわびる呪いを思い出した。オランダ人の幽霊船がなぜ彷徨う事になったのかも同時に。

蓮子がメリーへ振り向くとメリーも蓮子を見返している。等しく驚愕と期待をまなざしに込めて。思い出すべきではないか？ 勇儀は言明した。『合力と呪いに差がない奴らも多い』と。

二人は魔女に背中を向けてから、一度だけ肩越しに魔理沙の名を呼びかけてみた。返事はない。

「ねえメリー。わからないって怖いね」

「今更よ。私もいま思い出したけど」

秘封倶楽部は出口に向かって歩き始めた。

いつもの森の広場で薄明かりに照らされながら影が三つ立っているのも今夜が最後となる。諦めたかに思われた。蓮子とメリーが魔女に関わるのは。何しろ海底植物園に再び二人が訪れるまでに七の七倍、海の上では月と陽が巡ったのだから。もちろん流れる時間の異なる勇儀にとってを知る由もない事だったが、目の前にした娘たちのやつれた顔を見て何かしらの理解を得たのは間違いないだろう。

「勝負をしましょう」

「いいだろう」

再会の挨拶もなく蓮子から切り出された言葉に応じたのもそれゆえ。

「この杯に満ちた酒を飲んで酔えば私たちの勝ち。酔わなければ貴方の勝ち」

「私が勝てばお前たちを連れて行く」

言葉に蛇を含ませたにも関わらず笑い返してきた少女たちに鬼が微笑んだのもそれゆえ。

「私たちが勝ったら貴方の神通力を借り受けるよ」

メリーの言葉へ鮮やかに咲^わらうと勇儀は杯を掴んだ。

それは子どもの脛ほどもある高く細い青銅で作られており、上下から中央に向かって細く弧を描いた胴には精緻な線で山の根と海の源が描かれている。かすかな樟^{くすのき}の

香りが器そのものから立ち昇っており、酒口に顔を近づけて酒を嗅いだ鬼の髪から不意の火花がほとばしった。満たされていたのは欠片ながらに神の匂いがする酒であり、娘らは鬼殺しを見つけ出してきたのかもしれない。だがあまりに量が少ないのではないか。岩を砕くのに一滴の水では例え王水であつたとしても用をなさぬ。

「莫^ば迦^かめ」

失望とともに勇儀は杯の中身を臓腑に容れた。一秒。二秒。十秒。百秒。なおも嚙下を止められない勇儀の困惑した視線が少女たちに向けられ瞳が泳ぎ始める。

「そんなに強くないお酒でしょ。だからたっぷり用意してもらつたわ」

もぎ離すように唇を離した勇儀がよろけた。

「後どれだけあるんだい」

「海ほどに」

メリーの答えは鬼の顔を引きつらせる。秘封倶楽部が持ち込んだのはオオヤマツミの杯。イザナギとイザナミの直系であり山と海の神であると同時に酒を司る神から借り受けたのだ。

「よくも見つけてきたものだ。こんなのは聞いたことがないよ」

「アイデアを貸し出したのは私たちよ。神様に『海につながる酒杯を作るか?』って。せっかく魔理沙が集めた情報だもの。たしかに何でもかんでも手当たり次第で辟易はしたけれど、勇儀も目を通しておくべきだったんじゃない」

北欧神話の一物語を脳裏に浮かべる蓮子の目の前で勇儀がさらに飲んだ。

「賢い子供たち。これを手にするために何を手放したんだい」

「頼光にもそう聞いたの？」

ついに勇儀は笑った。今までのどれよりも大きく。怒りすら込めて

「負けだ。私に何を願う」

細長い杯を地面へ突き刺すよう勇儀は置いた。

「呪いを作って。それで魔理沙を呪うから。メリーと私にはその権利がある。私たちが禊を受けるにはそれが手っ取り早いもの」

禍々しい何かが人工の微風に乗って通過していく。「手

放したんじやなくて背負わされたのかい。愚かな子供たち。憎悪を持たずに呪うための方法を、呪うための呪いを携えて。魔理沙をどうしたいんだい」

「星になってもらう。そして空の終わりまで彷徨い続けるの。永く永く」

沈黙。

「それが呪いだと？」

「失敗した愚かな魔女を地上に置いておく理由はない。人間の姿すら捨て去り一人で迷い続けるのがお似合いよ。時の果てに至るまで」

「願いは叶えられた」

考えるよりも速く勇儀の片手にはいつもの盃が載せられており中へ液体が満ちていく。鬼の身体は霧散を始め

ており、金色の髪が煌めかず煙より薄くなつたあたりで液体の波が盃の縁をかすめた。

「今の私は星にして空へ投げ飛ばすのが精一杯つてところだが、あの魔女はどうにも敵が多い。きつと強く遠くまで彷徨うことになるだろう。秘封倶楽部は蠅螂の斧。もしくは香り。いずれにせよ盃の中へ含ませるには適つていたんだね」

蓮子が人差し指を振る。

「酒に浸すのは蠅螂の卵よ」

「非を認める」

鬼は笑つた。

「呪いは簡単に人を永久へ変えるんだつた。玻璃を目隠しではなく視界の拡大へ使うことを思いついた世代の娘

たち。面白いものを見せてもらったよ。盃ごと魔女へ渡そう。さっさと返すように伝えておくれ。さらば」

鬼の掌から盃が浮いたかと思えばすでに勇儀は背中を見せた後であり、黒い塊となっている魔女の手に呪いの容器は重ねられた。急な負荷に驚いた彼女は体勢を崩して転びそうになり、どうした訳かその拍子に全身を覆う影が粉々に砕け散って黒曜石じみた細粉を撒き散らせた。滑稽な格好で盃を捧げ持つ魔理沙へ蓮子が笑いかける。

「起きなさい魔理沙。さっさと準備をして」

「宇宙の終わりへ連れて行つてあげる」

「待て」

反論と盃を取り上げて秘封倶楽部はさっさと天蓋の端へ向かって歩いて行く。魔理沙がいつぱいに膨らんだ鞆

と箒を持って息を切らせて追いついたのは結界の出入口となつてゐる壁だつた。

「話くらい聞かせろ」

「いいけど、先にこれ持ってくれない？　蓮子と二人がかりだけど地味に重いのよ」

メリーから盃を受け取つた魔理沙は中身を一気に飲み下した。

「ちよつと。話くらい聞いたらどうなの」

「この盃は見覚えがあるし、あいつが無意味にこれを手放すとは思えん。あんたらの持つてきた答えがこれなんだろ？」

「ええ。とびきりの呪いよ」

「それは怖い。背中がひつついてりようめんすくな両面宿儺にでもなるの

か」

魔理沙の体の内側から光が発しはじめた。

「おい。大丈夫なんだろうな」

「大丈夫じゃないわよ。呪いだって言ったでしょ」

何かしらの罵詈を言わんと口を開けた魔女はそのまま止まり、少しだけ真剣な顔をする。

「なるほど。私はこれから星になるんだな」

帽子を目深に被り直し箒を地面へ押し付け調子確かめてから魔女は箒に跨った。

「説明しなくてよさそうね。その盃はさっさと返せですって」

「誰かと遊んで気長に待ってると勇儀に伝えてくれ。おっと」

大事そうに盃を上着の中へ突っ込んだ魔理沙の目から砂塵に似た光芒が吹きこぼれた。

「じゃあな異邦人ども。長生きしろよ」

その時になって初めて魔理沙の小さな背中を秘封倶楽部は見たのだ。そして魔女が振り返らずに飛び立ち、光に包まれて音よりも早く天蓋に馳せ昇ったのを見上げていた。

はるかな高みで何かが裂ける音を聞いたようだ。次にすべての空気を揺らす衝撃が天から墜ち来たり、金属蓋の螺鈿に沿って天極より大きな亀裂が八筋さつと流れた。その間を白々とした細かな罅がまばたき一つの速さでびっしりと広がり、縁にまで到着した時の一瞬に全てが止まった。

ドームを覆う流体金属の全てが同時に崩れ落ちると天よりの光はすべて失われ、遠近感を失った黒よりも黒い奔流がぶち撒けられた。金属の悲鳴と空気の押しひしやげる音、降り注ぐ海の怒濤が世界を破碎する轟音を巻き添えにその踵もて植物園と秘封倶楽部を踏み潰そうとする。それでも蓮子とメリーは見上げていた。飛び立った魔理沙を、空の極みに向けて昇り落ちていく流れ星を境界に逃げ込むその瞬間まで見ていた。ずっと。

そして魔女の噂は終わりを告げた。

京都に失われたままの地下水族館は無いと断定された時期、昼下がりの街道で歩行者のざわめきと静音車の駆

動音に秘封倶楽部は包まれている。

「勇儀への伝言をどうしたものか」

「魔理沙に無理だつて伝えてみる？」

メリーが天へ向かつて指差すのを追ってゆつくりと蓮子が顔を上げた。昼下がりの今でも青空の向こうにある星々のうち、どれか一つは魔理沙なのかもしれない。

「『ちゃんとやれ！』つて欠片を投げてきそうなんだけど」

「そしたらここから謝ろうか。あら。ビジョンが来たわ」

歩道の脇へ寄ってから空を向いて目を閉じたメリーが息を呑んだので蓮子も緊張しながら伸ばされた掌を睨へ添える。見えたのは紅白の空間に揺蕩う紅白の少女であり、そこへ箒に乗った黒白の魔女が辿り着く光景だった。顔を合わせた二人は何事か言葉を交わし合うが、魔女の

荷物から聞こえる鈴の音しか秘封倶楽部には聞こえない

「見つけさえすれば戻れる、か。ねえ蓮子。彼女はどこへ帰ったのかしら」

再び人の流れに乗って蓮子とメリーは歩き出した。

「そりゃあ魔法使いの国でしょう。謝るなら往来で大声を出すよりそっちに行った方がスマートよね。でも魔法使いの国に繋がる寺社なんてあったかな」

「それよりも勇儀に会う方が楽だと思うわ。二人は知り合いだから魔理沙とも会えるかもしれないし」

「生身の鬼へ会いに行くのは怖いなあ。またオオヤマツミの杯を渡して飲んだくれてもらおうにも海の底へ返却したし。そうだ。お供を現地調達できないかしら。犬。」

猿。雉」

「いるんじゃない？ さとりとそのペット達が」

秘封倶楽部はまた幻想へ飛び込むのだろう。そこが例え存在を信じるだけで不安を煽る恐ろしい場所であったとしても飛び込まずにはいられないのだ。

行くべき道は見えている。なにしろ薔薇の光射す海の皮膚、その下にある水の奈落で聞いたのだから。

あの棄てられた地獄の話を。

（終）